

調査団体名	加子母優良材生産クラブ	団体代表者名	安江錬臣
設立年	昭和36年(1961)	団体URL	なし
活動地域	中津川市加子母	調査員	辻、杉野
取材日	2009/11/18	レポート作成者	辻淳夫
他地域の林業家から「目標にはなるが、参考にはならない」 と言わせるほどずば抜けて素晴らしい加子母の檜生産の中心			
<活動内容>			
1) 共販市 2) 手間無尽 3) 種の保存 4) 試験挽き			
<p>1) 昭和36年(1961)から、当時、木は「山買い」だったのを、入札に正当な価格をつけさせるため、相対?にした。高度成長期で、ひと山いくらで買うと、何でも伐ってしまっ無駄が出るので、必要な木だけを買えるようにした。正当な評価で買ってもらえる仕組み。</p> <p>2) 戦後の拡大造林政策で一斉に植林したが、一人ひとりでは大変なので、皆でやることにした(1人で1反はできないが、3人なら3反以上可能)、みんなで勉強し切磋琢磨してレベルアップする。急がなければならない施業をメンバー協力のもと、素早く成し遂げることができる。すなわち、皆で協働することで「学びの場」としてや「他の山林所有者にとっての提示林」となるような計画がなされたこと。今の年齢構成は、当初の第一世代(70歳代)から最も若い世代(20歳代)まで切れ目がなく、33人の会員がついて上下流域の交流やメンバー研讀を行っている。</p> <p>3) 木も人間と同じでストレスがある。良い杉、檜の種、苗木を育てる(40~50万本)には、良い種を木に登って取る。</p> <p>4) 自分たちで枝打ちをした木々の、四面無節の材価を知るための「試験挽き」を製材屋と一緒にやる(勉強会プラス販売)。それをすれば、材価が分かり、「貯金通帳」ができる。つまり、時価を把握できる。山の価値を計算できるということ。</p>			
<会のモットー(何を大切にしているか)>			
明るく、楽しく、元気よく。生涯現役。			
<設立から現在に至るまでに変化したこと>			
明らかに、加子母檜のステータスが上がり、「加子母の材はすごい」と、光を浴びてきた。3代・4代前の先輩たちの努力の賜物。少しずつ認めてもらえるようになったと実感している。			
<連携している団体・専門家・自治体など>			
事業ごとに適した団体・専門家と連携している。			
<今までに行った調査・研究>			
立ち木乾燥、三つ緒伐り、新月木、満月木の実証試験			
<現在直面している課題>			
事業をやりすぎて、メンバーに迷惑をかけすぎていること。あとはあまり気にしていません。			
<今後やってみたいこと>			
メンバー各位がいろいろな情報、人脈を持ちながら、前向きな活動をしている。また、協働を望まれる方々なら、誰とでも一緒に頑張りたい。			
<そのためにはどんな情報・人脈が必要か>			
まずは、会話の時間を確保する、チャンスをつくる工夫をすること。努力すること。そこから始まる。			

<チームオリジナルの質問>	
質問内容:	安江さんの思いとは？
答え:	<p>「杣(樵)の思い」。農業という仕事は1～2年の時間的スパンで試行錯誤ができる。たとえ失敗しても取り返しがつく。けれども、林業という仕事は最低でも40～50年のスパン。自分自身の人生の中では、なかなか取り返しがつかない。だからこそ、「時間の蓄積」「時のすごさ」を実感する。また、自然のリズムを考えざるを得ない。人の人生のピークが30～40年とすれば100年を超す木々を伐採するとき、3代4代とつないできた「時のすごさ」に「畏敬の念」を持つ。当たり前のように大自然の中で木々と共に自分たちも「生かされている」ということに気づかされる。と同時に、大自然の前では、本当に無力な「一人」であると感じさせられる。</p> <p>今、戦後拡大造林した木々が手入れをしなければならないピークにきていて、それぞれがどんな形で森の未来を描くか？と考える大切なときである。それぞれの地域に合った形で。自分で100年の木を伐ってみると分かってくる。10年に一度の出合いの悲哀が。戦時伐採で山を裸にし、戦後復興で、治山治水で植えた45年生まれ的人工林のピークが、今やってきているが、その後のことを考えないわけにいかない。</p> <p>「感謝」ではなく、「報謝(謝恩謝徳)」。大自然に恵まれ、その恩に報いて徳に謝する心。山・森に携わる「山の民」にとっての基本的な心のスタンスを忘れずにいたいと思っている。</p>
<その他、伝えたいこと>	
<p>「加子母は特別」。同じ岐阜県(東濃檜を扱う)の林業家は口をそろえる。「目標にはなるが、参考にはならない」とも言われる。実際に、加子母檜の断面を見るとそれが実感できる。幅1mmでそろった年輪、きっちりと枝打ちされ、柱に挽いたとき、四面全てに節が出ない檜は特一の良材だ。それほど加子母の檜は素晴らしい。</p> <p>とても一代で成し遂げられる仕事ではない。安江さんは、そのことを誰よりも分かっている。安江さんの父親、祖父が植えて育て、安江さん自身が手入れをし、安江さんの子孫が伐る。林業家として、理想的な姿である。しかし、それを維持することの大変さは、本人たちでないと分からないであろう。「光はいっぱい浴びています」と、誇らしく笑う安江さんの顔は自信に満ちていた。</p> <p>加子母の歴史で素晴らしいのは、明治の頃、内木又六という当時の村長が村有林を30アールずつ小刻みにし、村民が気軽に買って所有できるようにした。村はその資金で村のインフラ整備をしたり、植林したりした。その成果が今、垣間見える。1,000戸中、800戸が加子母森林組合の組合員ということだ。尾張徳川家の帝室林野として大切に守られてきたのが、今の国有林であり、いわゆる木曾檜は伊勢神宮の遷宮用材として用いられる。加子母の山の民たちの誇りである。</p> <p>もう一つ、安江さんが語ったのは「水」のこと。木曾川の上流域で暮らし、名古屋市民が使う「命の水」を生み出す山を守る安江さんが心配するのは、「水はタダ」という、日本人の心持を考え直すときにきているということだ。「水の民」に「山の民」が警鐘を鳴らす。「私たちは豊かな自然に守られ、先輩たちの偉業で生かしてもらっているだけ」と、安江さんはいう。</p>	
	
安江さん。加子母道の駅にて	